

2-6.六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致

(1)はじめに

六ツ美地区は本市の南西端に位置し、原始より矢作川やはぎがわの氾濫原にあたり、肥沃な土地に人々の生産基盤が依拠してきた。人々の住居は洪水により形成された自然堤防上に立地し、生産基盤は沖積低地を利用した水田や畑であり、平野部の田園風景の中に集落が点在する地域である。古くから農業が盛んな地区であり、この地域特有の稲作儀礼をみることができる。

(2)用水開発

六ツ美地区は矢作川やはぎがわの氾濫原にあたり、近世以降も頻繁に氾濫に見舞われ、人々の暮らしは古来、矢作川の氾濫との戦いであった。矢作川の氾濫は洪水被害をもたらした一方で、上流部から養分を含む堆積物を運び込み、これが六ツ美地区の肥沃な土地を形成した。とはいえ、耕地への導水は課題でもあった。

①占部用水うらべ

占部用水は慶長 8 年(1603)に竣工し、矢作川流域で初めて開削された用水とされている。その後も改修されながら現在まで使用され、六ツ美地区 20 町地内を灌漑する用水である。現在の用水の大部分は埋管され、直接見ることはできない。慶長期(1596～1615)の占部用水開削の功労者である野本新十郎の も と しんじゅうろうと渡辺弥蔵わたなべ や ぞうは占部川神社に用水の守護神として祀られ、神社では毎年 6 月 16 日に「水恩忌」として祭りがおこなわれている。また、明治 18 年(1885)には二人の偉業を後世に伝えるため、「占部用水の碑」が思案橋のたもとに建てられた(昭和 27 年(1952)に占部川神社に移転)。

②高橋用水

高橋用水は明治時代初期に着手し、昭和 33 年(1958)に完成した。高橋町地内を水源とし、六ツ美地区 13 町内を経て西尾市にいたる。高橋用水は大正 4 年(1915)の大嘗祭悠紀斎田に用水を供給した。



図2-6-1 用水配置図

(3) 耕地整理

六ツ美地区で最初に耕地整理に着手したのは中島地区で、明治33年(1900)に耕地整理法が施行された直後に耕地整理事業に着手し、明治37年(1904)に完成した。中島地区の耕地整理は全国的にみても先駆的なもので、愛知県内では最初の耕地整理事業であった。この後、明治39年(1906)から上合飲木、下合飲木、高橋、下青野、福桶、安藤、高落等の地区で連合整理が行われ、明治42年(1909)に竣工した。大正元年(1912)からは高橋、赤渋、中之郷の連合整理が行われ、大正4年(1915)に竣工した。耕地整理や先にあげた用水整備により、六ツ美地区の収穫高は向上した。

また耕地整理により湿田から乾田となったことで二毛作が可能となり、昭和初期には菜種栽培で全国1位の生産量を誇るまでにいたった。当時、^{はすみ}羽角山から見渡すと六ツ美地区は黄色い絨毯(菜の花)で一面が埋め尽くされていたといわれるほど菜種栽培が盛んに行われていた。当時を記憶する人々には菜種の花が咲く時には養蜂家が蜜蜂を運んできて「はちみつ」の採集をするなど、はちみつの香りたけよう美しい豊かな農村であったと懐古される。

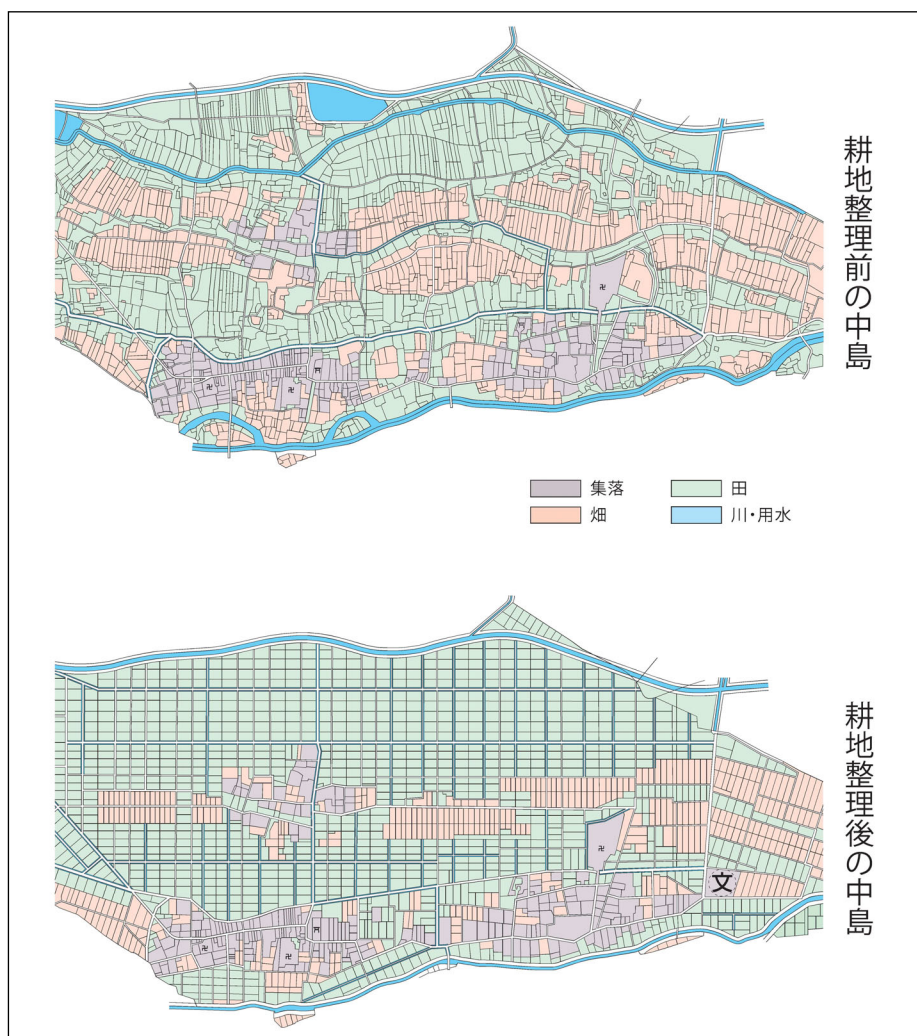


図2-6-2 中島地区耕地整理前後の状況

(4)六ツ美地区内の祭り

肥沃な耕地と灌漑技術の発展などを背景に、農耕地帯として栄えた六ツ美地区では、農耕に関係する祭礼行事や稲作儀礼が発達した。現在も残る六ツ美地区内の主な祭りとして、御田おた扇おうぎまつ祭り、六ツ美悠紀斎田(中島町)、チャラボコ太鼓(中之郷町)、七夕まつり(上三ツ木町)、ちりから囃子(下青野町)がある。

(5)御田扇祭り

①御田扇祭りの歴史

御田扇祭りは、正式には「皇大神宮御田扇祭」といい、地元の人々からは「おうぎさん」「たおうぎまつり」と親しみを込めて呼ばれている。

御田扇祭りは、近世岡崎藩の農民支配制度である手永制度¹のもと、藩領である手永内で行われた五穀豊穡を祈る祭りである。史料によれば宝暦6年(1756)にはその存在が認められるが、当時は手永から手永へと御田扇が巡行する形態であった。明和6年(1769)に本多忠肅ただとしが藩主となると手永は6つに区分される。本多氏時代には大庄屋の居村を発着地として各手永内において巡村が完結する形をとっていた。各手永内での巡行は旧暦6月に20日間前後かけて行われていたことが史料からわかる。

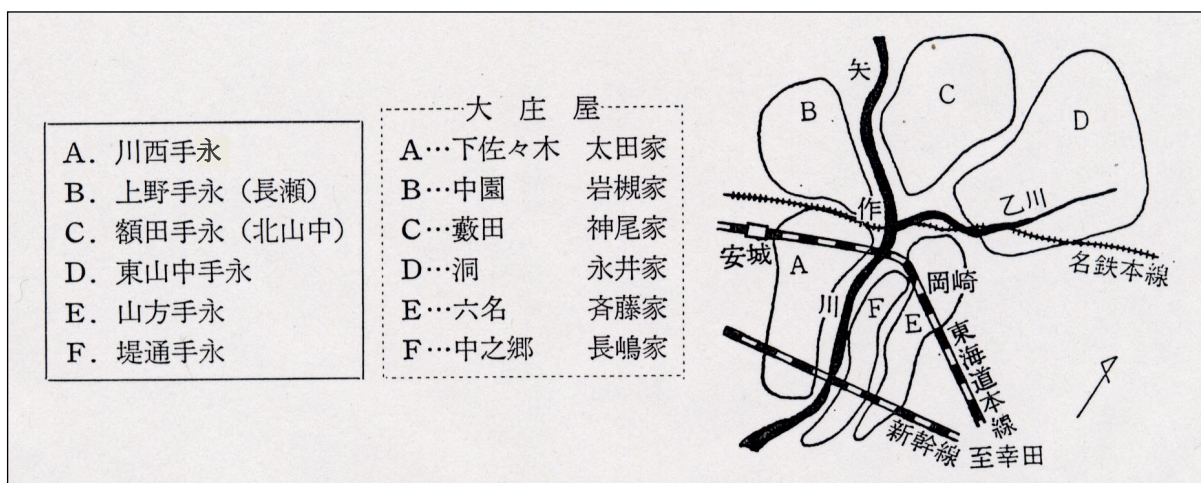


図2-6-3 六手永範囲と大庄屋

後本多家藩主時代には、御田扇祭りの開始(出発)時期の指示が岡崎藩から出され、6手永で一斉に開始されている。また、文化14年(1817)に伊勢神宮祓札の受取を大庄屋に命じる史料があり、天明元年(1781)に岡崎藩が伊勢御師おんしの山本大夫と春木大夫たゆうの両人に扶助し、家中扱いとしている事実を勘案すると、御田扇祭りと伊勢信仰が藩主導の下に結び付けられたも

¹ 手永制度は大庄屋制度ともいわれ、水野忠善が岡崎藩主に就任した正保2年(1645)に成立したとされる。寛文4年(1664)時点で9手永に区分され、それぞれに大庄屋が置かれていた。大庄屋に各手永内の村々を支配させた制度であり、全国的にも導入した藩は希少である。

のと想定される。

実際に額田手永の神輿の中から春木大夫銘の大麻が発見され、伊勢信仰と御田扇祭りとの関わりを示す資料として注目される。神輿内には現在、伊勢神宮外宮の豊受大神宮の御神札が納められているが、かつて額田手永や山方手永では扇が、川西手永では扇と鍬形が納められていたことが確認されている。

このように、御田扇祭りは岡崎藩の農民支配制度の中で、虫送りや伊勢御師の廻壇配札行為と結びつき行われてきた民俗行事と考えられる。岡崎藩の施策と密接に関わる御田扇祭りの存在は歴史的にも重要であり、他に類をみない民俗行事である点も大きな特色である。



図2-6-4 額田手永の扇

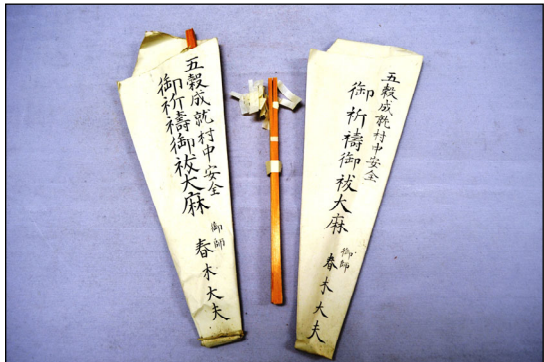


図2-6-5 額田手永の大麻(春木大夫銘)

②現在の御田扇祭り

かつては岡崎藩の6手永全てで行われていたが、現在も神輿渡御を継承しているのは堤通手永、山方手永の2手永のみである。堤通手永は20町(うち4町は西尾市)、山方手永は13町(うち1町は額田郡幸田町)で構成している。

後本多家藩主時代には旧暦6月に約20日前後かけて手永内の村々を神輿巡行していたが、明治時代になってからは、1年に1町ずつ神輿を渡御行列により巡行する形態へと変化し現在にいたる。堤通・山方手永とも田植えが終わった7月に1日かけてマチからマチへと移動する。

表2-6-1 御田扇祭り関係神社一覧

堤通手永			山方手永		
1	中之郷	中之郷神社	1	井内	八幡宮
2	上青野	櫛宮神明宮	2	下和田	犬尾神社
3	高橋	神明社	3	国正	稲荷社
4	上合飲木	神明社	4	正名	占部川神社
5	下合飲木	神明社	5	永野	永野神社
6	高落	神明社	6	定国	素盞鳴神社
7	新村	神明社	7	中村	占部天神社
8	西浅井	白山神社	8	坂左右	神明社
9	東浅井	社宮司社	9	野畑	鍬神社
10	安藤	鍬神社	10	若松	春日神社
11	福桶	三宮神社	11	針崎	御鍬神社
12	下三ツ木	三社神明社	12	柱	綿積神社
13	上三ツ木	神明社	13	羽根	稲荷神社
14	下青野	櫛宮神明社			
15	在家	神明社			
16	土井	社宮司社			
17	牧御堂	薬師堂			
18	法性寺	五社神明宮			
19	宮地町	犬頭神社			
20	赤渋	御鍬神社			

③堤通手永御田扇祭りの一例

御田扇祭りの行列の出発・到着は各町の神社となる。堤通手永を構成する1町である宮地町には御田扇祭りの起点となる神社として、上和田城主宇都宮泰藤²が貞和2年(1346)に犬のおかげで災難を逃れ、その犬の頭を祀ったという伝承のある犬頭神社がある。本殿は明治22年(1889)に、拝殿は明治34年(1901)に再建された神社である。

現在、祭りは7月20日前後の日曜日に行われている。神輿などを送る側の町の神社で神事を執り行うことから始まり、その後渡御行列が出発する。各町の女性部や子ども会も参加し、町の規模によっても異なるが、行列は300人を超えることもある。行列の最中には藩、町、人が繁栄するように願う祝歌が歌われる。青々とした稲の繁る田園地帯を幟や紅白の扇、花傘を持った人々が練り歩く様には、その年の豊作を願う人々の思いが表れている。送る側と迎える側の町境で受け渡し式を行い、行列は迎える側の町の神社へ向けて出発し、到着後に神事が行われる。地元の小中学生による浦安の舞、女性たちによる奉納踊りなどが奉納され、祭りは神社内でも大きな賑わいをみせる。

手永内の順村は、旧暦の6月に約20日間前後で一巡するものであった。この形式は江戸時代末期まで続き、明治時代に入って手永制度が終焉を告げても、祭りは6手永の中で存続していた。時代の流れに合わせて、次第に形態を変えてはいるが、先のとおり現在は2手永において存続している。

山並みを背景に、地形に起伏のない田園地帯に大屋根の社寺とその社叢が点在し、またそれら社寺を中心に集落が形成され、それを街道が結ぶ。五穀豊穡を願い、青々と広がる田園地帯の町から町へと神輿を中心とした渡御行列が巡行する姿は、岡崎市独特の歴史的風致となっている。



図2-6-6 犬頭神社



図2-6-7 堤通手永御田扇祭りの渡御行列風景
(平成24年(2012) 中之郷町から上青野町)

² 宇都宮泰藤(1302~1352年)は下野国宇都宮氏の末裔で、三河大久保氏の始祖とされる人物。南北朝時代に碧海郡上和田の妙国寺前に移り住んだ。孫泰道は宇津氏と改姓し、さらに泰道の5代孫の忠俊・忠員兄弟の時に大久保氏となったといわれる。

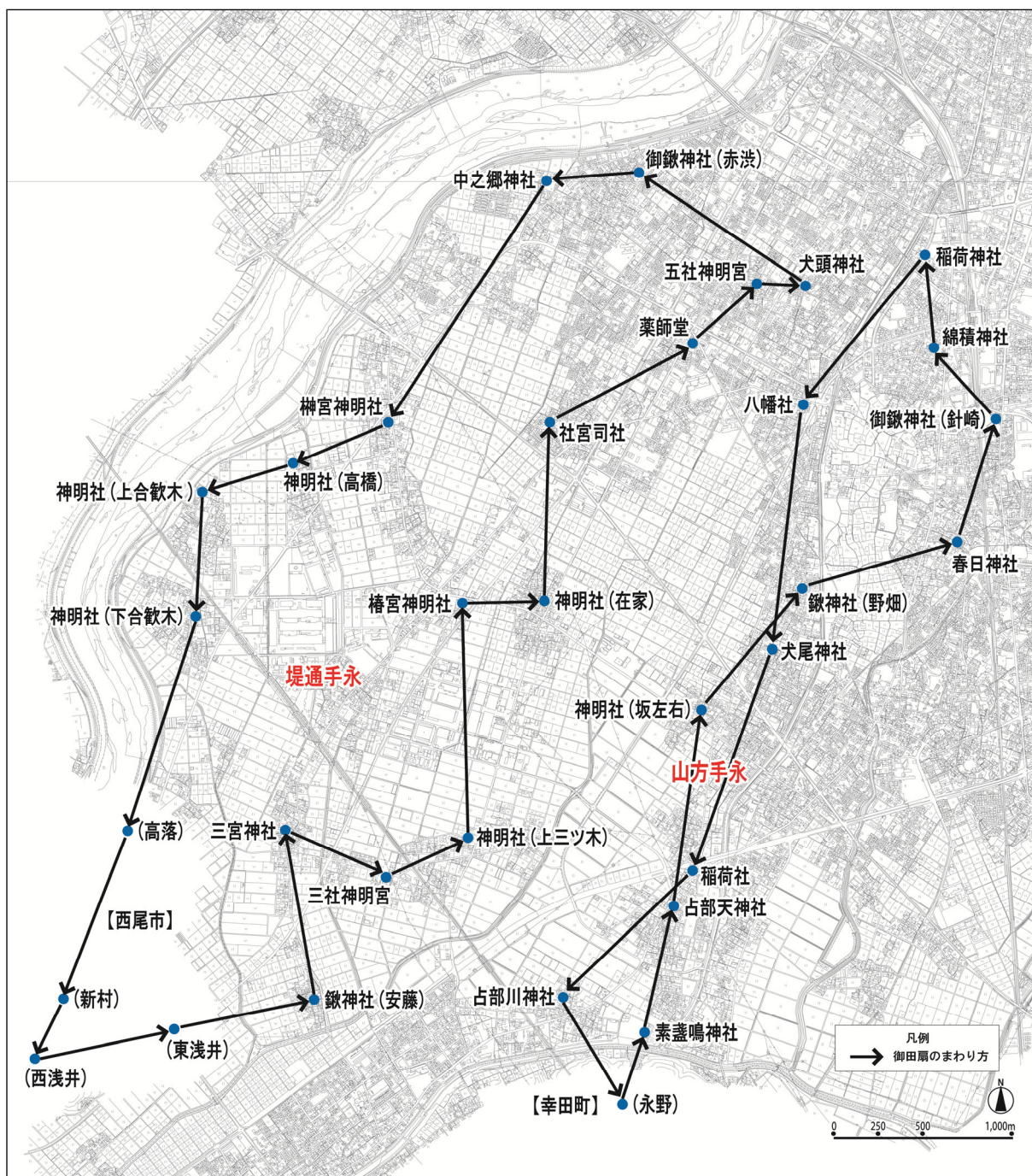


図2-6-8 御田扇祭りの巡回ルート(堤通手永・山方手永)

(6)六ツ美悠紀斎田お田植えまつり

①六ツ美悠紀斎田の歴史

大嘗祭は天皇が即位後、初めて行う新嘗祭^{にいなめさい}で、新穀をもって皇祖と神々を悠紀・主基^{すき}の両田に迎え、収穫祝いと今後の豊作を祈願する宮中の儀式である。京都を中心に東日本を「悠紀の地」、西日本を「主基の地」と称し、大嘗祭に供える米を作る田を斎田という。大正4年(1915)の大正天皇即位の大嘗祭では、悠紀斎田に六ツ美村中島の4反歩(約 3,960 m²)、主基斎田に香川県山田村(現・香川県綾歌郡綾川町)^{あやうた}が選ばれた。斎田地として選ばれた背景には、耕地整理が完了していたこと、用排水路が整備されていたこと、交通の便がよいことが理由としてあったといわれている。

中島の地が大嘗祭悠紀斎田に決定されると、八幡社社務所が大嘗祭悠紀斎田新穀奉納事務所となり、境内には農具小屋・清斎所・井戸・休憩所・精米所などが建てられた。境内中央北側には悠紀斎田の時に使われた農作業道具を入れた収納庫が今も残されている。また、八幡社社殿の北側には昭和8年(1933)12月に建てられた大正宮がある。この社には大正天皇が祀られており、以前はお田植えまつりの神事が行われ、お田植踊りが奉納されていた。現在、お田植えまつりは悠紀斎田広場で行われている。

大嘗祭に新米を供納した後も、これを記念して毎年6月第1日曜日に悠紀斎田お田植えまつりとして、長年にわたり保存・継承されている。

②現在の六ツ美悠紀斎田

大嘗祭の終了後も、斎田奉耕者やその子孫、村民有志等によって斎田地は保存され、田植唄を歌いながら踊り、昔ながらの装束・農具を使って苗を植え、その年の豊作を祈願する「お田植えまつり」として続けられている。六ツ美村青年会など地元の関係者を中心に続けられ、昭和41年(1966)には岡崎市指定無形民俗文化財に指定された。昭和47年(1972)には「六ツ美悠紀



図2-6-9 現在の悠紀斎田



図2-6-10 大正宮



図2-6-11 お田植えの風景

斎田保存会」が設立されそれまでの活動を引き継ぎ、現在まで継承されている。

現在は、悠紀斎田の古跡地に六ツ美地域の歴史や文化財などを紹介する六ツ美歴史民俗資料室を核とし、六ツ美地域の歴史・文化の保存と伝承、地域交流の拠点となる地域交流センター六ツ美分館「悠紀の里」が整備され、平成26年(2014)2月に全面開館した。斎田は悠紀の里の悠紀斎田広場に移設された。

お田植えまつりの当日は、事前の祈願祭が八幡社で行われる。斎田広場では午後2時から神事が執り行われ、神官により五穀豊穡などを祈願する内容の祝詞が読まれ、参列者による玉串奉奠が行われる。祭りは式典の後、お田植唄に合わせて、地元婦人会や小学校女子児童によるお田植踊りが披露される。お田植唄の拍子に合わせて斎田周辺を早乙女が踊りながら練り歩き、実際に苗が植えられていく風景は、大正時代から受け継がれてきたものである。平成27年(2015)には悠紀斎田100周年を迎え、記念式典が秋篠宮同妃両殿下の御臨席のもと盛大に開催された。100周年記念事業を開催するにあたっては、平成24年(2012)に地元で実行委員会を立ち上げ、六ツ美地区が一体となって準備を行ってきた。お田植えまつりを継承することにより、稲作文化の伝承、地域交流・地域活性化を図っている。



図2-6-12 お田植踊り

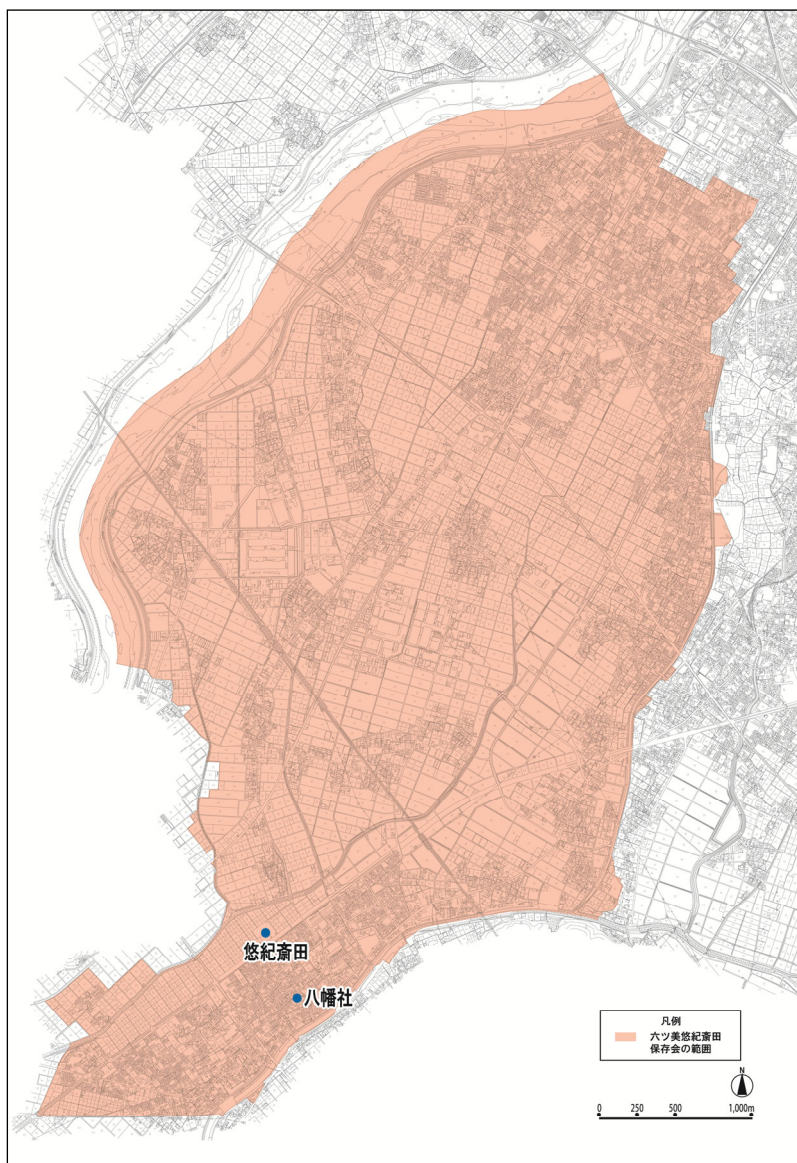


図2-6-13 悠紀斎田保存会の範囲

このように、六ツ美地区は近世以降、県内でも先進的な農業地域としての歴史をもつ。また、近世には岡崎藩の農民支配体制の施策と相まって御田扇祭りという独特の民俗事例も生まれるなど、農耕儀礼に関わる民俗事象が色濃く残る背景には、現代まで農業を主たる生産基盤として発展してきたことがあげられる。

祭りを受け継ぐことを通じて、地域がまとまりをもち、さらには活性化へとつなげていこうとする団結力を感じることができる。稲作儀礼の伝承に地域をあげて取り組み、六ツ美地区特有の歴史・文化を次の世代に伝えていこうと努力している姿は、地域に根差した新しいコミュニティ作りの姿でもある。市街地では宅地化が進み、従前よりも田畑は減少しているが、田園地帯に社寺が点在し、その周辺に集落が形成されている風景は、農作業や祭りをを行う人々の営みが調和する歴史的風致であるといえよう。

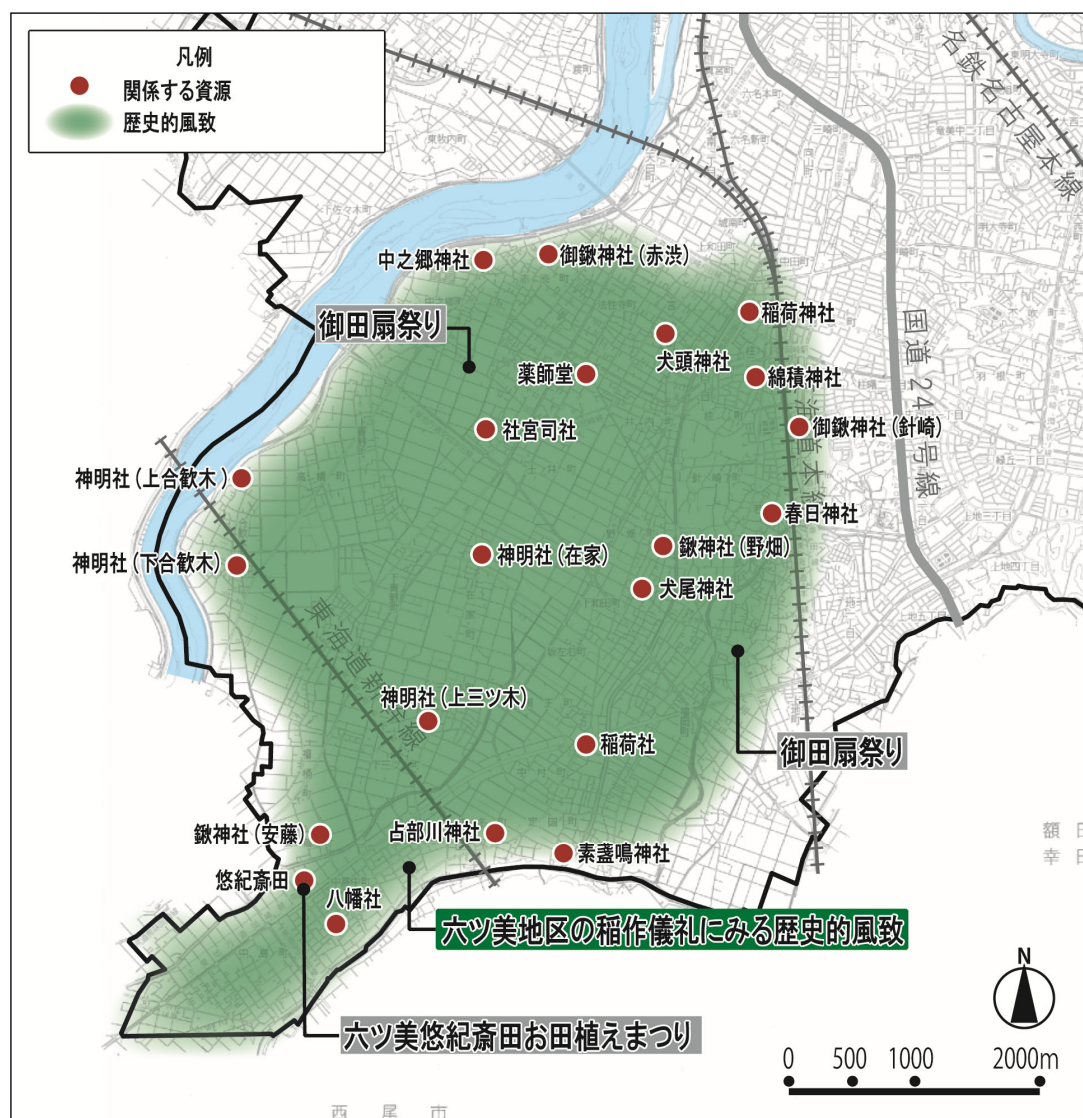


図2-6-14 六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致の範囲